

学院長 嶋田 順好

今、話題になっている出来事の一つに 5 月 6 日に行われた関西学院大学と日本大学とのアメリカンフットボール部定期戦において、日大の選手が、きわめて悪質な反則行為を犯したという事件があります。アメフトは、巨体と巨体をぶつけ合う最も激しい格闘技と言えるスポーツです。それだけに危険防止のため、ボールを手放した選手に不要なタックルをすることは厳に戒められています。にもかかわらず、この試合ではプレーを終え、完全に脱力している関学のクォーターバックの選手の背後から、日大の選手が猛然とタックルを仕掛け、三週間のけがを負わせてしまいました。下手をすれば脊髄や頸椎の損傷で半身不随にもなりかねない極めて悪質、危険な反則でした。しかも、この選手は、3 度目のプレーでも、交代した選手にレイトタックルを仕掛け、5 回目のプレーのときには相手選手に殴りかかるという不祥事まででかしたのです。そこで審判から退場処分を宣告されました。

学生全日本代表候補にも選ばれている優秀な日大の選手が、何かに憑かれたかのように最初の 5 つのプレーの間に 3 回も執拗にして悪質な反則を繰り返したことは、常識では考えられないことです。この選手をしてそのように追い込まれざるを得なくさせる強い力が働いたのではないかとの疑念を深めたのでしょうか、関学アメフト部の監督とディレクターが抗議の記者会見を開き、どうしてこのような反則をすることになったのか日大側で調査し、説明責任を果たすことを求めました。

日大側は当該選手やチーム関係者に聞き取り調査をすることもなく、監督、コーチから当該選手に「1 プレー目で QB をつぶせ」という言葉が」出されたことを認めつつも、「これは本学フットボール部において、ゲーム前によく使う言葉で、“最初のプレーから思い切って当たれ”」という意味にすぎず、「指導者による指導と選手の受け取り方に乖離が起きて」生じたトラブルであったと言い逃れしようとしました。しかしながら、関東学生アメリカンフットボール連盟は、独自に当該選手、両チーム関係者、審判、観客に聞き取り調査をし、ビデオによる詳細な分析もした上で、日大の監督とコーチが記者会見で弁明した内容が虚偽であり、ほかならぬ監督、コーチの指示によってこの反則行為が引き起こされた」と裁定したのです。その結果、日大の監督、コーチとも連盟から除名処分されてしまいました。

昨年、日大アメフト部は大学日本一を決める甲子園ボールで関学と戦って 27 年ぶりに優勝し、世間から大いなる注目を浴びました。今回の事件は、そこで手にした栄光を失うことなく、いかにしても連覇を果たしたいとの勝利至上主義の誘惑に監督もコーチも駆られたことによって引き起こされた悲劇と言えるでしょう。それにしてもフェアプレーが重んじられるべき大学スポーツで、教育の論理をまったく逸脱したライバル校選手への傷害事件が監督・コーチの主導で仕組まれた事実に驚きと悲しみを覚えざるをえません。しかしそのことを、まるで他人事のように思ってはならないでしょう。宮城学院に連なる者たちも、日大の監督やコーチと同様の過ちを犯す弱さを抱えているからです。それ故、私たちに求められることは「主の祈り」のなかの「誘惑に遭わず、悪い者から救ってください」との祈りをわがための祈りとして真摯に受けとめ、日々「目を覚まして」(マタイ 26 章 41 節) 歩み続けることに違いはないのです。

ところで、関西学院は南メソジスト監督教会から派遣された W・R・ランバス宣教師によって 1889 年に創立されたミッション・スクールです。“Mastery for Service” をスクール・モットーとして掲げ、そのことが学生にもよく浸透している素晴らしいミッション・スクールです。ご自身も関学神学部の卒業生である仙台五橋教会の豊田通信牧師が、「堂々と勝ち、堂々と負けよ」という関学アメフト部ファイターズが重要な試合に臨むときに必ず朗読する以下の詩を信徒の皆さんに紹介しておられます。

「いかなる闘いにもたじろぐな。偶然の利益は騎士的に潔く捨てよ。威張らず、誇りをもって勝て。言い訳せず、品位を持って負けよ。堂々と勝ち、堂々と負けよ。勝利より大切なのはこの態度なのだ。汝を打ち破りし者に最初の感激を、汝が打ち破りし者に感動を与えよ。堂々と勝ち、堂々と負けよ。汝の精神を汝の体を常に清潔に保て。そして汝自身の、汝のクラブの、汝の国の名誉を汚すことなかれ。」